

第3回 作文コンクール

心のふれあい大賞

入賞作品集



主催 公益社団法人 福岡県医師会

共催 福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後援 九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会
北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）

目次

表彰式	2
主催者あいさつ	3
入賞作品紹介	
一般の部 最優秀賞	4
河野桃子 さん	
一般の部 優秀賞	6
織田朋子 さん	
一般の部 優秀賞	8
古賀多美子 さん	
中高生の部 最優秀賞	10
居石優輝 さん	
中高生の部 優秀賞	12
太田慎吾 さん	
中高生の部 優秀賞	14
堀育愛 さん	
小学生の部 最優秀賞	16
N・M さん	
小学生の部 優秀賞	17
高橋心咲 さん	
小学生の部 優秀賞	18
O・M さん	
表彰式の様子	19
選考委員	20
募集要項	21

表彰式



(平成29年1月21日(土) 福岡市・イムズホール)

二列目

●福岡県医師会長

松田 峻一良

●中高生の部 優秀賞

太田 慎吾さん

●中高生の部 最優秀賞

居石 優輝さん

●中高生の部 優秀賞

堀 育愛さん

●西日本新聞社社会部部长

田川 大介

一列目

●一般の部 優秀賞

古賀 多美子さん

●一般の部 優秀賞

織田 朋子さん

●一般の部 最優秀賞

河野 桃子さん

●小学生の部 最優秀賞

N・Mさん

●小学生の部 優秀賞

高橋 心咲さん

●小学生の部 優秀賞

O・Mさん

主催者あいさつ



公益社団法人 福岡県医師会
会長 松田 峻一良

福岡県医師会では平成二十六年より福岡県医師会作文コンクール「心のふれあい大賞」―わたしのまわりの医療体験―事業を開始いたしました。これは、医療従事者と患者、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて、病気になった時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集するものです。

寄せられた作品の中から、優秀作品を発表することで、県民の方々や医療関係者の方々の医療に対する意識を高めていただくことを目的としております。

今年度は、一三〇点以上ものご応募をいただき、選考の結果、一般の部・中高生の部・小学生の部から最優秀賞、優秀賞の合計九名の方々を選出し、表彰させていただきました。

本冊子では、受賞者の方の作品を紹介させていただきますので、ご高覧いただけます幸いです。



一般の部

最優秀賞

久留米市
河野 桃子

「空は青」

う。どうして、こうなっちゃったんだろ

こんな病気にならなければいけないほど、悪いことをした？

心の中でつぶやいてみても、事実を変えることはできない。半年前に片方だけのもやもや病と診断され、そのあ

とで脳梗塞を起こした。医者言うこととさえわからなくなったのは、四十四歳のときのことだった。

「これは、何かな？」

先生は目の前にあった携帯電話を手にとった。

「時計？」

悩みながらも、そう言った。多分、違っているのだろうな、と思いながらも、そうとしか答えようがなかった。

「それじゃ、あれは？」

先生は壁にある時計を指さした。

「電池……」

そこで、沈黙が流れた。

「入院ですね」

「そんな……」

着いて来た夫の言葉を遮ったのは、

どこからともなく車椅子が現れたからだった。それに座ったときから、正真

正銘の病人となった。

その前に、兆候はあった。二度、一過性脳虚血症を起こしていたからだっ

た。

えっ？ 何？

一瞬、頭の中が真っ白になって立ち尽くしたのは、半年前のことだった。

すべての言葉が消えてしまっ、すうーという感じで自分という存在自体が何か底の方に吸い込まれていくように思えた。

「おい、どうした？」

そう言う夫の顔もぼんやりとして、実態がない。しばらくその場に立ち尽くしたあと、「ううん、何でもなし」と答えた。そのセリフが出たことに、

自分自身が一番ほっとした。だけど翌日、また同じことが起きたのだ。近く、脳神経外科に行って、MRIを撮り、「もやもや病」と診断を受けたのだった。

もやもや病というのは、脳に栄養を送る太い血管が詰まって、不足した血液を補うように、まわりから細かい血管が発達する病気、のことだ。この血管が煙草を吐いた煙のように見えるこ

とから「もやもや病」と言われている。原因は不明とのことで、今も研究が進められている。その病気に自分になったら、やはり「どうして」という言葉が浮かんでくるのは当たり前だろう。だけど、答えなんかはない。

もやもや病になった。脳梗塞を起した。バイパス手術を受けた。高次脳機能障害になった。苦しくてつらくて、それでもそのことを言葉にできなくて、何度、言葉を飲み込んだことだろう。まわりは動いている。日常を送っている。笑って泣いて怒って、そしてまた笑って、と繰り返しているのに、ひとり、椅子に座ったまま、まわりを眺めている、それが私だった。どうすることもできないことにいらつきながらも、次の行動がわからない。同時にふたつのことを言われると、頭の中が真っ白になった。

仕事もない お金もない 頭の中はぐーるぐる 朝起きて 犬連れて 三

十分ちょっとの散歩道 電話もない
あるわけない 薬は一日三度飲む♪
吉幾三の歌じゃないけど、「俺ら東京さ行くだ」の曲調で歌いたくもなる。
バセドウ氏病も発症していた。脳梗塞との因果関係ははっきりしていないが、ある意味で関係があるかもしれない、と言われている。

ある日、血管内科の先生に言った。
「私、このまま生きていても仕方がない、と思うんです」

何度か通っているうちに、心を開いた先生だった。患者のひとりひとりを持っているものも、その背景も違うということに気づいているような先生だった。こんなことを言っちゃいけないけれど、冴えない先生だった。羽おった白衣にもどこか皺が寄っている。しかし、そこが何とも言えない味わいを醸し出していた。それまでも数多くの先生や看護師さんにお世話になったけれど、気弱な言葉を吐けたのはこの先

生が初めてだった。

先生は黙り込んだあとで、こう言った。

「だけど、今日はいい天気ですよ。空は真っ青だ」

坊主頭の先生は、照れたように笑った。その笑顔の中に、大切なことが隠されているような気がした。

空は青。

その言葉が胸に広がった。五月の風がやさしく吹いている。みずみずしい青空が広がっている。この空を見ている限り、まだ生きている、と思えたのだ。診察室を出るとき、振り返って先生の顔を見た。

「ありがとうございます。また、来ます」

あの先生の言葉が、今でも頭の中に残っている。空を見上げながら、今日も生きていこうと思っている。



入賞作品

一般の部

優秀賞



直方市
織田 朋子

「見守られ続けた 2週間」

「また、お会いしたいですね。でも、病院にはもどってこないでね。」

退院の日、ナースステーションまで歩く廊下の途中で、すれ違う看護師さんや、病院スタッフの方たちが、口々に声をかけてくださいました。私とス

タッフの皆さんのやりとりを聞いて、夫が

「皆さん笑顔で、家族のように声をかけてくれるね。たった2週間の間だったけど、温かい病院で過ごさせてもらって本当によかったね。」と、言ってくれました。

たった2週間の入院期間とはいえ、入院するまでは、不安だらけの日々を過ごしました。

たまたま受けた脳ドックの結果で「要精密」の通知が来ました。未破裂の動脈瘤が見つかったのです。父も母も、脳の大病を患い、命を縮めてしまったことが頭をよぎりました。

「まだまだ元気でいられますように……」

そんな気持ちから、S病院へ。MRの画像を見せていただいた時には、人間の脳の造りが精密で美しいことと、こんなにも綿密な検査ができるその技術の高さに驚きました。

先生は、その画像の見方をていねい

に説明してくださり、手術を勧めてくださいました。脳の模型を使つての説明は、とてもわかりやすかったです。一も二もなく、手術をお願いしたものの、頭を開けることや、脳の血管を扱うことに対しては、不安でたまりませんでした。

そんな私の背中を押してくれたのは、何よりも、先生の的確でわかりやすい説明です。そして、説明をしてくださる、やわらかな口調、柔和な表情に安心させられました。先生からすればたくさん手掛ける手術の中の一つかもしれません。でも、私にとっては、今まで経験したことのない大手術です。そんな時に、O先生の優しい表情とていねいな説明は何より救いでした。

家族の助けもうれしかったです。夫は忙しい中、入院の日・手術の日と2日間も休みをとってつきそってくれました。特に手術の日、夫は3時間も落ち着かない気持ちで待っていたことを思うと、感謝でいっぱいです。手術の

後は、

「改造人間になったね。」

なんて冗談を言っていました。安心した夫の心が感じられる心地よい言葉でした。

手術後の体を動かさず、飲み物も飲めずにいる数時間のつらかったこと。

看護師さんが、しょっちゅう様子を見てくださったのが何よりありがたかったです。そのおかげで、何とか乗り切ることができたのです。

集中治療室を出て部屋に帰ってから、退院するまでは、看護師さんに、また病室清掃のスタッフの方に、どれだけ元気をいただいたか、わかりません。

やっとベッドで起き上がったときに「笑顔ができましたね。安心しましたよ。」

と、看護師さんが声をかけてくださいました。それまで、ずっと見守ってくださったんだなということが、その言葉から伝わりました。

また、病気を理由に退職できるか

なって弱気になっていた時に

「先生は、いつも通りの生活ができるように手術をしたのだと思いますよ。」

私は、アドバイスする立場ではないけれど、こんなによくなったのに続けられないって決められたら、先生は、悲しむと思いますよ。」

と、笑顔で言うてくださったのが、一番心に残っている言葉です。この時の言葉には、とても勇気づけられました。傷口の痛みのこと、体の動かし方、傷口の洗い方、わからないことは、小さなことでもわかりやすく、親切に教えてくださいました。手術後、先生とは、

必要な時・決まった時にしかお会いしませんので、看護師さんのわかりやすい言葉かけはありがたかったです。優しさとは、このように、相手の立場に立って、ていねいに言葉を返してくれる誠実な態度のことを指すのだと心から思いました。

病室には、看護師さんのほかに、清掃スタッフの方が毎日入室されます。

短い会話ですが、わたしのことを気づ

かってくることが伝わりました。毎日の短い会話で、明るい気持ちにさせられましたし、楽しい時間でした。

また、栄養職員さんの季節感のある食事にも心遣いを感じました。土用丑の日にうなぎがでたこと、一日に赤飯が出たこと、家でも忘れていたようななつかしい献立で、思わず写メにとって家族に見せたほどです。

心細い時だったから、一つ一つの皆さんの心遣いが余計に心にしみました。皆さんがチームとして治療をバックアップしてくださったおかげで心身とも元気になりました。この時に感じた一つ一つの優しさを、私も誰かに返していきたい、そう感じた2週間でした。



一般の部

優秀賞



久留米市
古賀 多美子

「希望をくれた 交換日記」

六月のある日、看護学生の娘から『こんなことを学んでいるよ。』と講義資料のコミック『コウノドリ』七巻の一部コピーを渡されました。実際にNICUの医療現場を経験された教授の講義で使用されたもので、娘の誕生当時

と瓜二つの内容でした。二十九週で予想もなかったリスクを抱えての出産の、両親の葛藤や医療現場の現実を描いた内容に、二十年前のあの頃を重ね合わせていました。二十歳になって看護学生として学んでいる娘から、誕生当時に自分に充てられた九つの病名の病状説明をしてくれる姿に『しっかり学んでいるなあ。』と嬉しくなりました。実際に、その当時の私は、何も理解できず、生死の狭間で必死に生きようとしている我が子の無事を祈り続けることしかできない状態でした。久々に母子手帳や当時のたくさんの手紙、そして五カ月半に及んだ集中治療室での入院生活を支えていただいた看護師さん、保母さんとの交換日記を取り出して振り返った途端、すぐにあの頃に戻っていました。本当に懸命に命と向き合う日々でした。必死に生きようとしている娘と家族全員で戦い続けた時間でした。

二十九週と二日、体重740g、妊

娠中毒症、子宮内胎児発育遅延にて帝王切開。平成七年十月二十六日十六時二十分誕生。そして娘には九つもの病名が付けられました。超低出生体重児等々、当時この羅列された文字の意味を何一つ理解できない状態で自分を責め続け現実を受け入れられない状態で、ただただ『生きてくれ。』と祈るしかなく、ずっと悪夢を見続けている毎日でした。NICUで懸命に命を繋いでいる娘に、搾乳した冷凍母乳を届ける日々、授乳量が1cc増えては喜び体重が減少しては落ち込み、何度も呼吸停止を繰り返し、発熱に抗生剤が効かず、全血交換治療でやっと命を繋ぎ止めている状態の娘でしたが、泣き声だけは、元気いっぱい生きているよと自分の存在を伝えているようでした。そんな日々に、一人の保母さんから、メモで娘の様子を知らせていただきました。返事をメモに書き、そんな交流が次第にノートのやりとりになり、そして、私達家族を支えてくれる交換日

記になりました。

治療についての質問、担当医師への橋渡しはもちろん、押し潰されそうな不安もたくさん聞いていただきました。いつしか、泣き声だけは大きい小さな娘のことを支えていただいている看護師さん達にもその輪がどんどん広がって、その日の娘の様子が離れていてもたくさん伝わってくるようになりました。毎日この交換日記を見ることが楽しみになり、大きな支えとなり、自分を責め続けていた不安だらけの私の心に『希望』という二文字が芽生えてきました。忙しい治療の合間に、たくさんの方が私達親子のために時間を割いて書き込んでいただき励ましていただきました。誕生から退院までの五カ月半、たくさんの方に支えられて、娘のスピードで成長していききました。最初は、絶望と不安だけの日々だったのが、その交換日記を通して、多くの方が必死に支えてくれてる現状にふれて、娘のゆっくと成長する姿にも

励まされて、私の心の大きな変化に気付かされました。私達は、『生きていく。』のではなく、『生かされている。』ということ。私は、それまでの人生で、生命ということにこんなに真剣に向き合うことはありませんでした。娘の誕生という大きな奇跡が私の価値観を大きく変えてくれました。『生まれてきてくれてありがとう。』という言葉を、何度も娘に声掛けしている私です。退院後もたくさんさんの治療と成長フォローのために、小学校卒業まで、いくつもの病院にお世話になり、専門家の方にアドバイスをいただき見守り導いていただき、今があります。その根底には、いつも、あの絶望の時に一筋の希望として大きく存在する交換日記がありました。あの交換日記が私達家族を希望のスタートラインに立たせてくれました。本当に、この交換日記に関わっていただいた方々に、どれだけ感謝の気持ちを伝えても伝えきれません。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、その交換日記を提案してくれた保母さんと二十年間ずっと交流を続けさせていただいています。お互いの子供の成長話ができる関係です。五カ月半の入院生活から卒業する日に、彼女から『交換日記の交流なんて初めてだったんですよ。こんな些細なことでもこんなに支えになったと喜ばれるなら、今後も取り組んでいきますね。本当にありがとうございます。』とお声をかけてくれました。なんて素敵なことでしょう。きっとその後も私達親子のような家族を支え続けていることでしょう。医療の現場は、病気の治療だけでなく、医師・医師を支える看護師さん・保母さん、全員で私達に生きる力を与えてくれた大きな存在です。支えていただいております。ありがとうございました。



中高生の部

最優秀賞



福岡市・高校2年
居石 優輝

「心の医療・ 言葉の治療」

息を切らし、病室のドアを開けると、人工呼吸器や点滴の管、導尿管などたくさんある管がつり下がりがり、頭や指先につながれている祖父が眠っていた。よく笑う祖父のやわらかな表情とは異なり、苦しそうな表情で顔は強張っていた。

父は顔を下に向け、母は涙ぐんでいた。私も立ちすくみ、三人とも言葉をかけることができなかった。父が私の肩をとんとんとたたき祖父の側へ行った。手を握ると涙があふれてきた。私は涙を必死でこらえた。

「頭の手術をしたので、今は眠っています。お辛いかもしれませんが、懸命に生きようとなさっているのです、声をかけてあげてください。来てもらって喜んでますよ。」

と医師が優しい表情で話してくれた。不思議とその一言が、心にすっと入ってきて、不安でいっぱいだった心が癒されたようだった。

体調を崩し、地元の病院に入院したと聞いてから数日後、看護師が朝の見回りで意識がなかった祖父を発見し、手術ができる病院へ緊急搬送された。硬膜下血腫だった。迅速な対応のおかげで、命は助かったが、高齢の祖父は体の負担が大きく、術後の管理が大変だと祖母が話してくれた。不安そうな

顔で話す祖母の所へ医師が来て、「私達も全力を尽くし、サポートしていきます。不安な事があれば何でも相談して下さいね。」と話した。

「ありがとうございます。」

と返事をした祖母の表情や声は少し明るくなり、落ち着きを取り戻したようだった。医師の言葉は、患者である祖父はもちろん、家族も救われた。この病院なら安心だと素直に感じた。心強かった。

数日後、お見舞いに行くと、集中治療室から個室に移動していた。少し瘦せた祖父は顔をくしゃっとゆるませ、「よく来てくれたね。ありがとう。」と小さくなった声量で話し、嬉しそうだった。

食事の時間は別室でみんなと一緒に食べていた。ほぼ液体状態の食事を祖父の口に運ぶ。

「みんなで食べるとおいしく感じるよ。」

と私に言った。時折、話が弾み笑顔に

包まれていた。食べることは生きること。病気も快方へと向かうかもしれないと期待し、心の中に一点の灯りを点じた。

しばらくして、家族で病院へ行き病室のドアを開けると祖母の目は少し腫れていて、ぐったりとしていた。

「おじいちゃんの容態が悪化してね。今から説明を受けるから一緒に聞いてほしい。」

と話した。みんなで医師の部屋に向かった。

「今日はつらいお話をしないといけません。体がもう栄養を吸収できる状態ではありません。延命治療についての説明と現在の状態についてお話しします。」と話し始めた。病気についてはゆっくりと分かりやすい言葉で話してくれたので、学生の私でも理解することができた。完治はできないという内容だったが説明が十分であると強く感じた。延命治療についても、どういった方法なのか、メリットやデメリット、延命

治療をしないという選択もあるということを知りやすく話してくれた。私達を感じた疑問には一つ一つ丁寧に言葉を選びながら返してくれた。そして最後に医師は、

「私は患者やそのご家族の心に寄りそうことも治療の一つだと思えます。不安に思うことがあれば何でもお話しして下さい。」

と言ってくれた。とても心強かった。

言葉や表情はその人の心を写す。それが相手の心に伝わり冷たくも温かくもしてくれる。医師の言葉には祖父を最後まで責任もって看取ります。安心して下さい。一緒に支えていきましょうという心が伝わってきた。患者、家族、医師、皆がつながっているのだと安心した時、信頼という言葉が生まれる。

数日後、祖母は延命治療をしないと医師に伝えた。栄養を送る点滴さえも針を自分で抜いてしまい、日に日に衰えていた。早く体を楽にしてほしいと伝えた。医師は、

「わかりました。そうしましょう。」と共感してくれた。辛い選択だったからこそその一言が祖母の気持ちを楽にした。

程無くして、祖父が亡くなった。安らかな表情だった。終末期医療とは患者の心身の苦痛を和らげ、穏やかに死を迎えることだと辞書にあった。祖父はよい終末期医療を受け命を全うできたのだと自信をもって言える。

人々は科学によって、医学を発達させ、たくさんの命が救われるようになった。医学とは素晴らしい学問である。

しかし、医学は患者という心をもった人間を相手にしていることを忘れてはいけない。私が体験したように「言葉の力」で心が癒され、救われるのだ。それはいつしか信頼関係を生み、皆が同じ方向を向き支え合う。ゆとりがない現代の医療だからこそ、心の医療を考えなければならぬと感じた。



入賞作品

中高生の部

優秀賞



福岡市・高校1年
太田 慎吾

「命」がつくる、 人の輪

僕の姉は、重度の障がい者だ。寝たきりの状態で、自分で呼吸もできず呼吸器をつけている。母は、そんな姉の介護をしている。

姉が生まれたのは、今から二十八年前だ。そして、重い障がいがあると診

断されたのは生後十か月の頃である。母はとてもショックを受けたらしい。この子は施設に預けることになるのだろうか、と様々な不安がよぎったそうだ。しかし、

「今は、どんなに重い障がいの子も、おうちで暮らすのが当たり前になりつつある。病院だけでなく家に居ながらも医療の助けを受けられるんだよ。」という、当時のドクターの言葉を聞き、母は在宅ケアの道を選んだ。

姉が生まれて今日まで二十八年間、こんなにも長生きできたのは多くの人のおかげだ、と母は言う。在宅ケアをすると決めた母のために、介護の仕方をおしえてくれたドクターや看護師さん、毎週のように家に訪問してくれたまた別のドクター、そして現在もお世話話になっている訪問看護師さんやホームヘルパーさん、リハビリの方など、姉を中心として我が家はたくさんの人たちに支えられてきた。

それは、介護・福祉だけではない。障がい者の親同士が集まってコミュニティが生まれ互いに支えあっている。母は僕にこう言った。

「あなたのお姉ちゃんを支えてくれた人たちは、病気をみているんじゃない。人を、家族を、生活をみてくれるんだよ。お姉ちゃんを中心に家族がどう幸せに生きていくかをみてくれているよ。」

この言葉を聞いて、僕はハッとしました。今まで関わってきた全ての人は、姉のためだけではなく、自分を含めた家族のために働いてくれていたのだ。「当たり前だけど、あたりまえじゃない。」

これは障がい者の生きる権利は当たり前にあるけれど、それを支えてくれる人々の存在は当たり前ではない、という意味の言葉だ。我々障がい者の家族は、支えてくれる人に感謝の気持ちを忘れてはならないのだ。

僕は今まで姉としっかり向き合ったことがない。意思疎通が出来ないし、なんとなく寂しかったからかもしれない。もしも、お姉ちゃんが健常者だったら…と何度も思った。でも、障がい者の姉の周りには常に人の輪がつくられている。姉の周りになると「命」あることの大切さに触れることができるのだ。

障がいの親同士のコミュニティでは、多くの障がいのある子の死にも直面する。今日の昼までそこにあった命が消える、障がいの者にとって死はとても身近なものだ。毎日「命」があるかないかが大事、でも、だからこそ周りの健常者は、普段意識しづらい「いま生きている」ということを実感できるのではないだろうか。

姉を支える人たちは、みんな姉の命を愛している。静かに、けれども確かに生きている命に、「自分たちが生きていること」を教えられているのだ。

姉は、今幸せなのか、僕にはわからない。しかし、周りの人の心を動かすパワーが、たくさんの人々の心を繋ぐパワーが、姉の中にはあるような気がする。

世の中には、障がいの者を軽視する人がいるかもしれない。しかし、よく考えてほしい。そこにある命には、たくさんの方の人の輪があるということ、その命を愛する人がいるという事を。





中高生の部

優秀賞



みやま市・中学3年
堀 育愛

「医者のがせる技」

十一月のサッカーの試合中、僕は、生まれて初めて骨折をしました。そのとき僕は、キーパーをしていました。僕がシュートボールを弾いた瞬間、右手の小指に今まで感じたことのない痛みが走りました。ハーフタイムの時小指をけがしたことを監督に伝えたところ、

ろ、僕の指を見るなりすぐに病院へ連れて行ってくださいました。そして、C病院の整形外科の担当医に見てもらったことになったその日から三ヶ月間の通院が始まりました。

レントゲンを撮った結果、骨折していることが分かりました。その後、先生が僕の指を包帯で固定してくださいました。その手つきがとても速くて驚きました。僕が包帯の巻き方を覚えるため、真剣にその手つきを見ていたところ、先生は気持ちを察してくださいましたのか、すぐに

「包帯の巻き方を教えようか。」

と、声をかけてくださいました。僕は、心を読んでもらったと思いました。患者の表情から気持ちを察すること、これが、医者の尊敬するところで、為せる技の一つ目でした。

一週間後、今度は母に連れられて通院しました。診察を待っている際、母からもう少し近くの病院へ移ろうと提

案がありました。僕は、この先生に心酔していたため、拒否しました。

診察が始まると、すぐに先生から柔軟性をチェックされました。僕は、相手が硬かったのです。また、ストレッチを教えてくださいました。また、僕は手を使うキーパーの練習ができたため、下半身だけでも鍛えられるように練習前にストレッチをするというのを教えていただきました。僕も母も先生のアドバイスに納得しました。診察が終わると母が説明が分かりやすい先生だったと、僕が先生に心酔することを理解してくれました。説明の一つ一つに説得力を持たせ、相手により分かりやすく伝えること、これが二つ目の医者のがせる技でした。

それから、順調に治療してきた二ヶ月間に事故は起きませんでした。部活で手を使わない練習をしていた時、つまずいて右手をついてしまったのです。また強い痛みが走りました。このとき、僕

の通院が延び、母や部員の皆に迷惑をかけてしまうかもしれないと不安になりました。次の日、僕はハラハラしながら通院しました。その時の母の呆れた表情を今でもよく覚えています。しかし、先生は温かい笑顔で僕の話聞いてくださったのです。そして、これからは、ランニングを中心に行ったほうがよいと教えてくださいました。僕はこの時迷惑をかけた方への申し訳なさの反面、不安だった気持ちをすべて取り除いてくれた先生への感謝の気持ちでいっぱいになりました。患者の不安を取り除くこと、これが医者が為せる三つ目の技でした。

一ヶ月後、先生の言いつけを守り、無事に治りました。

僕は、この三ヶ月間、先生から三つの技を学びました。これらは、普段友達と話す時や相談に乗るときに必要なと思います。ですから今まで意識していなかったこれらの技をこういった場

面で活かしたいと思います。また将来医療関係の仕事に就きたいと思うようになりました。もし、そのような仕事に就けたならば、三つの技を患者さんの前で使っていきたいと思います。





入賞作品

●小学生の部 最優秀賞 — 「いのちのプレゼント」

小学生の部

最優秀賞

福岡市・小学1年
N・M

「いのちのプレゼント」

わたしのむねには、しゅじゅつのあ
とがあります。うまれてすぐに、しん
ぞうのびょうきがわかりました。でも、
どうしてしゅじゅつをしたのかわから
ないままでした。
ことしのなつやすみに、ごねんぷり
にKびょういんにいきました。びょう

いんはとてもひろくてきれいだったけ
れど、どんなけんさをするのかこわく
なりました。

はじめに、けつえきけんさをしまし
た。ちゅうしゃのはりをみたら、むね
のおくがドキドキしました。どんな
ちがながれていくので、わたしのちが
なくなってしまうたらどうしようとお
もいました。

つぎは、むねのしやしんをとしまし
た。にっこりピースをしてうつろうと
したけれど、おかあさんにだめだとい
われてがっかりしました。そのあとお
なかをみせたり、うんどうのけんさも
して、かんごしさんに

「よくがんばったね。」
とほめられて、うれしかったです。

きょういちにちびょういんにいて、
くるまいすにのっているこどもやあた
まにほうたいをまいているこども、は
なにチューブをつけているこどもなど、
たくさんびょうきのひとをみました。
わらわずにまじめなかおでずつとす
わっているおとなのひともみました。
わたしは、あかちゃんのとこのこと

をおぼえていません。おかあさんから、
しゅじゅつしつのかなにはたくさんのお
いしやさんがいて、いっしょうけん
めいにいのちをたすけようとしている
んだよとききました。たいへんなしご
とだとわかりました。おいしやさんに
「だいじょうぶだよ。げんきだよ。」
といわれるとほっとします。げんきに
してくれてありがとうとおもいます。

まいにちいろいろなひとがびょういん
にくるけれど、わたしのようびょう
きのことをわすれるくらいげんきに
なってほしいとおもいます。わたしは、
いのちのプレゼントをおいしやさんに
もらいました。それはわすれずに、た
くさんわらってげんきなおとなになり
たいです。

おいしやさんへ

むねにてをあてると、ドクドクとし
んぞうのおとがするよ。プールには
いっても、いっぱいはしつても、ジェッ
トコースターにのつてもげんきだよ。
おいしやさん、わたしのしんぞうの
しゅじゅつをしてくれてありがとう。

Mより



小学生の部

優秀賞

福岡市・小学1年
高橋 心咲「おとうとが
にゆういんして」

2ねんまえのふゆ、だいじなおとうとがにゆういんしました。かわさきびようとゆうびょうきでした。おとうとは、ひどいじょうきょうだったのでつらそうでした。まいにち、たくさんおのけんさをして、たくさんちゅうしゃもして、てにはてんできをずとつけ

たままでした。からだじゆうに、たくさんでんきのせんもついでいてベッドからおきることのできない、たいへんなせいかつでした。ごはんもあんまりたべれなくて、おくすりもじょうずにのめませんでした。おきているあいだはずっとないでいたそうです。

わたしは、おとうとのおみまいにいつでもなかにはいれずにいつもめんかいしつというところであってました。まいにちまいにち、おとうとにおてがみをかいていました。あるひ、おとうとのたんとのおいしやさんとかんどしさんにあうことができました。とてもやさしそうなせいとかんごしさんでした。せんせいは、わたしに「ひいくんはぜったいなおるからまってね。せんせいもがんばるから、こちゃんもさみしいだろうけどがんばってまってね。」といいました。わたしはとてうれしかったです。せんせいならおとうとのことをぜったいなおしてくれるだろうとおもいました。そして、おとうともがんばっているから、わたしもがんばろうとおもいました。かぞくといっしょにすごせなくてまいにち、ばんばのいえでないていたけど、せんせいとかんごしさんもがんば

ばつてくれてるから、わたしもしつかりまっていようとおもいました。

かんごしさんは、おとうとがよろこぶようにちゅうしゃのあとにはるテープやてんてきのテープにまいにちいろいろなキャラクターのえをかいてくれました。おくすりのふくろにも、かわいいえをかいてくれました。おかあさんもおとうとも、よろこんでいて、たくさんしゃんをとってました。おかあさんは、かんごしさんたちのえがおとささえがあったから、がんばれたんだよ。といっていました。そして、たいいんのひに、かんごしさんが、わたしとおとうとに、かわいいてづくりのメダルをつくってプレゼントしてくれました。すごうれしかったです。にゆういんしているおとうとだけじゃなくてわたしのこともほめてくれてうれしかったです。

せんせいもかんごしさんも、けがやびょうきをなおすだけじゃなくて、まわりのかぞくのこころもげんきにしてくるすごいおしごとだなあとおもいました。おとうととかぞくをえがおにしてくれてありがとうございました。



入賞作品

●小学生の部 優秀賞 — 「先生のまほう」

小学生の部

優秀賞

八女郡・小学5年
O・M

「先生のまほう」

「えっ。あさってにはたいいんできるの。」

わたしは、新しい学年、新学期が始まってすぐ病気で入院することになりました。弟が一年生になるので、いっしょに行けることを楽しみにしていました。でも、入学式の日に入院と言われとっても悲しくなるどころか、初め

で、受けとめることができませんでした。

四月十二日の朝病院に行きました。わたしは、病院というのはこわいと思っていました。最初、てんてきをするとき泣いてしまい、時間がかかりました。でもたんなりの先生が「大丈夫ですよ。ゆっくりで。」

と言ってくれました。そこで少し、病院はこわいと思っていたのがきえました。それから、病室にどうすると、また新しいで合いました。かんごしさんがじょうかいをしてこういってくれました。

「大丈夫、おなかすいた。昼ごはん食べたいよ。」

と言ってくれました。わたしは、きちょうが少しなくなりました。

それから何日かたち、いろいろとなれてきました。毎日いろんなかんごしさんがこうたいでねつなどをはかりにきてくれました。その時、いろんな話しをしました。とても楽しくなりました。少しずつ元気になり始めてけんしゅうの先生と遊ぶようにもなりました。わたしの体は治っていないけれど、心のいろんな思いは治ったようでした。だんだん笑ってあそぶようにもなり、

先生も早く治そうと必死のようでした。よく伝わってきました。先生も早く治るようがんばっているのを見て、わたしも早く治したいと思いはじめました。うれしくなりました。

こんなことですごしていると、たいいんという話しもしてもらえました。先生が、

「このままじゅんちようにいけば、あさってにはたいいんできますよ。」

と言ってもらえて、うれしいよりも先生ですごいの方が強く心にありました。心の色がまるでいろんな思いの温かい色でした。

たいいんする日になりました。すぐく先生やかんごしさんと親しんでいて少しさみしくなりました。病院に来た日とは全く考えや気もちがちがいました。体も心も元気になりました。別れる時、わたしが、

「会いたくないけど会いたいね。」

と言うと先生は、「そうだね。いつでも会いにおいで。」と言ってくれました。そして別れた後こう思いました。

「ほんとうにすごいな先生のまほう。」

表彰式の様子

(平成29年1月21日(土) 福岡市・イムズホール)



一般の部・最優秀賞
河野 桃子 さん



一般の部・優秀賞
織田 朋子 さん



一般の部・優秀賞
古賀 多美子 さん



中高生の部・最優秀賞
居石 優輝 さん



中高生の部・優秀賞
太田 慎吾 さん



中高生の部・優秀賞
堀 育愛 さん



小学生の部・最優秀賞
N・M さん



小学生の部・優秀賞
高橋 心咲 さん



小学生の部・優秀賞
O・M さん

選考委員

福岡県教育委員会

小西 聡子

西日本新聞社社会部部長

田川 大介

筑紫女学園大学文学部日本語・

日本文学科教授

中村 萬里

福岡県医師会広報委員会委員長

塩谷 眞子

福岡県医師会副会長

堤 康博

福岡県医師会理事

中村 秀敏

福岡県医師会理事

馬郡 良英

福岡県医師会理事

佐藤 薫



募集要項

- 医療従事者と患者さん、その家族との「信頼関係」という医療の原点にスポットをあて病気になる時に感じたことや介護にまつわる経験、医療従事者とのふれあいなど、医療・介護に関する体験記を募集します。
- 400字詰め原稿用紙3枚～5枚以内（1,200～2,000字）
鉛筆（B、2B）／ボールペン／万年筆／パソコン／ワープロのうち、いずれかを用いて、濃くはっきり書く。
※パソコン・ワープロの場合、1ページ400字（20字×20行）。
- 表紙をつけて、部門、題名、〒住所、氏名（ふりがな）、年齢（生年月日）、性別、所属、電話番号、FAX番号を明記して下さい。
- 福岡県内の学校に在籍する児童生徒、および一般県民
※医師を除く
- 自作の未発表作品に限り、盗作、二重投稿は固くお断りします。
※応募作品について盗作等による著作権侵害の争いが生じても、主催者は責任を負いません。
- 応募作品は返却いたしません。
- 入選作品の著作権、出版権は主催者に帰属します。
※そのため主催者、後援者がインターネット上で開いているページや、雑誌、テレビ、ラジオ、書籍、教材などに利用されることがあります。
- 【一般の部】最優秀賞 1名
優秀賞 若干名
【中高生の部】最優秀賞 1名
優秀賞 若干名
【小学生の部】最優秀賞 1名
優秀賞 若干名
受賞者には賞状と副賞を授与いたします。

【問い合わせ】福岡県医師会総務課 作文コンクール係（TEL 092-431-4564）

主催：公益社団法人福岡県医師会

共催：福岡県、福岡県教育委員会、西日本新聞社

後援：九州厚生局、福岡市、北九州市、久留米市、飯塚市、大牟田市、行橋市、福岡市教育委員会、北九州市教育委員会、読売新聞社、産経新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社（順不同）



平成29年2月発行

公益社団法人福岡県医師会

〒812-8551 福岡県福岡市博多区博多駅南2-9-30
電話：092-431-4564 FAX：092-411-6858

